「兄さん歸りませう、暗くなつてよ」

と豐ちやんが言ふ。

芳ちやんは瀧一の左の手を握つて、前後にぶら〳〵振り動かして歸らう〳〵とせめる。暗いとこはいかねと言はれて、二人とも恐ろしい話でも思ひ出したかキャッと言つてすがりついた。

「房ちんは永久に死んでしまつた」

と瀧一は心にくり返へしながら二人の手を引いて岩を下りた。浪の音はドゞドウッと寄せてはスーッと引いてゆく。その都度白い泡が岸に殘つては次第に消うる。空は紺青に暮れてキラ〳〵と星が二つ三つ。瀧一は小供の手をとつて、とぼ〳〵と泡近い砂を踏んだ。

俳句

紫溟吟社句錄

若葉

皷岩絞め緒蔓(カツラ)も若葉して　此君子

若葉すや出水名殘木川裾に　仝

一山の若葉統ぶ宮鉾の杉　仝

寺見ゆるま一ト上りや峯若葉　水郷

道程も桝目數へや里若葉　仝

洪水(ミズ)ありてより温泉荒れを若葉せり　青淪

自然枯れ名殘り若葉も瘤を出す　仝

玉磨ぐも日馴れ仕事や若葉風　痩脚

染め絲の日に燒けようや若葉風　仝

沙漠來て水得し思ふ若葉風　岳童

明けて眼に鳴戸隔てや島若葉　虛割

寺の構圖に朱して仰ぐや峯若葉　唐辛紅

落葉木は立てぬ掟や城若葉　八洲郎

若葉すや鍛冶の音も澄む沼哥　ヤヨキ

水雞

安堵寢の子が寢崩れやなく水雞　青淪
水雞鳴くや筆耕明けを光る灯に　仝
水雞鳴くや酷に煮れば脂も消ゆる魚　水郷
水雞なくや井溢るゝを旅硯滌ぎもす　仝
水雞なくや田仕事半ば殘しある　江村
訴の田を鳴き分つ水難かな　瘦脚
荷役濟んで船に総寢や鳴く水雞　嘘割
沼供養夜半鳴く水雞神告げか　唐辛紅
沼の水雞我飼ふと云はん誇大哉　八洲郎

青嵐

青嵐日歸り旅の歸途一歩　滴人
布石負けも奇手成功や青嵐　仝
背渡りを牙峰數へつ青嵐　水郷
青嵐湖海を分つ一青螺　仝
海に暮れて山の灯戀し青嵐　唐辛紅
青嵐湖何祭る神樂笛　仝
青嵐木賃枕も舟反りに　瘦脚
あさり散らして日に醉ふ鳥や青嵐　仝
水條案内待つを汐勢や青嵐　嘘割
石に刻る登山案内や青嵐　此君子

羅

羅や灯かざせは水に漣漪あり　水郷
羅や纓結びようも蔦たけて　岳童

春雜吟

水郷

かほと落ち湛ふ椿を湖に出づ
砂俵に洪水思ふ驛の椿哉
大手松に藤咲けり佳節待つ頃を
藤に二度來て異なそしり聞かんとは
鞍上に藤折りつ飛橋返り見て
藤咲くやふと願ほどき忘れ居て